

琉球病院 Monthly



独立行政法人
国立病院機構 琉球病院
National Hospital Organization RYUKYU Hospital

Vol.103
2023. June

発行者 琉球病院事務部長
大城 栄作

基本理念 この病院で最も大切なひとは医療を受ける人である

琉球病院マンスリー 2023年6月号について

琉球病院院長 福治 康秀

いつも大変お世話になっております。

この度、琉球病院マンスリーを久しぶりに発刊いたします。新型コロナウイルス感染症の状況があり、発刊を休止しておりましたが、現状を踏まえ再開することとしました。

この間、いくつもの新型コロナウイルス感染症のクラスター発生、新型コロナウイルス感染症病棟の立ち上げと運用、医師数減等による診療機能の制限等を行いました。関連機関の皆様には、多大なるご不便をおかけしたものと思っております。ご協力、本当にありがとうございました。そして、多くの関連機関の皆様からのご支援や応援をいただきました。心より感謝申し上げます。

一昨年、新型コロナウイルス感染症の治療病棟を開設するに当たり、依存症治療を主とした病棟から新型コロナウイルス感染症の治療病棟へ転換を行いました。この度、依存症治療を主とした病棟の再立ち上げをいたします。新型コロナウイルス感染症の治療病棟の運用中は、依存症治療のための入院を精神科救急病棟において数を制限して継続しておりましたが、地域のニーズに十分答えることができないままでした。新型コロナウイルス感染症の収束と、感染症法上第2類から第5類への移行、そして、依存症医療のエキスパートである真栄里仁副院長を迎えるタイミングで、令和5年6月1日より依存症治療を主とした病棟を再開いたします。今後とも、どうぞよろしくお願いたします。

さて、先ほど述べたように、6月から真栄里仁副院長を迎えます。真栄里先生は、久里浜医療センターで長年依存症医療の中心を担い、また依存症医療に限らず幅広く精神医療を展開してきました。また、多くのマネジメントも経験しております。当院は、副院長不在がしばらく続いておりましたが、新しく真栄里副院長を迎え、臨床、教育、研究、そしてマネジメントにおいてさらに発展し、地域のニーズに応じた各種専門医療・精神科救急医療を提供すべく、職員一同頑張る決意です。

今後とも、どうぞよろしくお願いたします。

● 地域医療連携室だより

琉球病院では、受診相談や地域、行政、他医療機関からの窓口として地域医療連携室を設置しております。一般精神をはじめ、アルコール依存症を含むアディクション全般、治療抵抗性統合失調症治療薬で効果のあるクロザピンによる治療、認知症、児童思春期外来といった様々な疾患をお受けできる診療体制を整えております。また、中北部圏域を中心とした地域の皆様によりよい質の医療を提供し、適切な対応ができるよう充実した取り組みを行い、地域のニーズに応えられるよう日々努力していきたいと思っております。初診はじめ、受診については予約制となっております。

ご相談はお気軽に地域医療連携室までお問い合わせください。

院長



ふくじ やすひで
福治 康秀

1964年生まれ、那覇市出身、首里高校卒。1993年琉球大学医学部卒、琉球大学医学部精神神経科入局。95年那覇市立病院精神科、96年琉球大学精神神経科、2009年琉球病院精神科部長、2010年副院長を経て2014年琉球病院長に就任。日本病院・地域精神医学会理事。琉球大学医学部 臨床教授。

診療科

- ・一般精神科
- ・こども心療科
- ・クロザリル外来
- ・アルコール依存症等外来

病床数

353床

- ・精神 151床
(一般精神・クロザピン専門・精神科救急)
- ・アルコール依存症 44床
- ・児童思春期ユニット 4床
- ・重症心身障がい 90床
- ・医療観察法 37床



路線バス

那覇BS(下り)または名護BS(上り)より沖縄バス[77番名護東線]浜田バス停下車徒歩3分

自動車

那覇市から40分沖縄自動車道金武インターから名護向け5分

お問い合わせ

時間 8:30 ~ 17:15
(土・日・祝日・年末年始以外)
TEL 098-968-2133(代)
内線 231・234

地域医療連携室(直通)

TEL 098-968-3550
FAX 098-968-7370

治療抵抗性精神疾患への医療

精神科医師 木田 直也



クロザピンの治療状況

治療抵抗性統合失調症の患者さんに対して、当院では2010年2月からクロザピン（CLZ）治療を開始し、全症例は延べ385例になりました。CLZ治療前には暴力行為や多飲水などの問題行動のために隔離や身体拘束が必要な患者さんも多くいらっしゃいましたが、CLZ継続例では問題行動も消失、もしくは軽減し、隔離や身体拘束は、ほとんどの症例で解除できています。週に3回のCLZ専門外来も行っていますので、患者さんのご紹介をお願いいたします。当院でのCLZ治療や沖縄県での地域連携の実際については、ノバルティスファーマ社の医療関係者向けサイトのクロザリル/クロザリル適正使用の流れ (<https://drs-net.novartis.co.jp/dr/product/clozaril/guide/>) でも動画が公開されていますので、ご参照ください。

こども心療科

心理療法士 我喜屋 良行

このコロナ禍の期間、こども心療科では、診察時のアクリル板の設置や、プレイで使用する玩具や遊具、待合室の絵本や保護者向けの書籍の制限など、感染拡大予防のために、ご不便をおかけしておりました。また関係機関の皆様にも、対面でのケース会議の制限やオンラインでの実施など、たくさんのご協力をいただけたことに感謝申し上げます。

5月からコロナが5類に移行したことを受けて、こども心療科でも玩具や遊具、書籍などの使用を開放するなど、少しずつ以前と同じような診療の風景が戻りつつあります。これまではマスクやアクリル板に隠されていた、お子さんや保護者の皆さんの笑顔や声に直接触れることができるのは、私どもにとっても新鮮な気持ちになりながら業務に取り組んでいます。

現在は対面での診察を基本としておりますが、最低限の対策として、マスク着用の推奨、来院される際の体調確認、体調不良時の予約変更のお願い、診察室の換気などを行っておりますので、ご来院の際にはご協力をお願いいたします。

重症心身障がい医療

療育指導室長 金城 安樹

西I、II病棟では2月14日～24日にかけて個別面談を開催しました。コロナ禍の影響により対面での個別面談は約3年ぶりの開催となりました。ご家族の思いを直接お伺いし説明する事ができる機会の重要性を改めて実感しています。新型コロナウィルスが発生し約3年、利用者にとって多岐に及ぶ活動制限や家族交流の制限等は療養生活に大きく影響を及ぼしました。医療安全及び感染防止対策と共に、利用者のQOL向上及び権利が損なわれる事がないよう努めなければなりません。利用者の最善の利益の提供に向け、多職種やご家族との連携を深め、利用者支援の質向上に取り組みたいと考えます。

包括的地域精神医療

訪問看護師長 長嶺 早苗

訪問看護はコロナ禍の影響を受けながらも感染対策を徹底しながら必要とされている利用者の訪問や薬セットなどを行ってきました。

院内のクラスターが発生した時には、病棟の応援協力チームと訪問看護チームに分かれての対応となりました。

初めのクラスター発生時は、訪問看護を限定し、電話による体調確認にならざるを得ませんでした。ひと月程するとやはり病状悪化の見られる利用者も出始めたり、これまで訪問をキャンセルしがちであった利用者が、来てほしいと話されたり、対面での訪問看護が利用者にとって大切であることを改めて気づかされました。令和3年度の訪問看護総件数は6,252件であったのに対し、令和4年度は7,322件と1000件を超えて上回っていました。これからも、感染管理をしっかり行いながら、地域で暮らす利用者を地域支援者の方々と連携しながらサポートできる訪問看護チームでありたいと思っています。地域支援者の皆様これからも宜しくお願いいたします。

DPAT 活動報告

主任心理療法士 前上里 泰史

コロナ禍の2年間で、当院の病棟ではクラスターが4回発生しました。院内対策本部の設置、現場との連携および応援要請、院内の診療体制の制限など、BCPを発動し、クラスター対応をしてきました。当院のDPATはその対策本部の応援や現場対応をしました。当初は混乱の最中、体制構築に時間を要しましたが、この2年間でその対応は円滑かつ効率的に対応できるようになり、DPAT隊員でなくても、院内職員が協力し、対応できるようになりました。繰り返されたクラスター発生によって、職員の感染対策への意識が変化し、指揮命令系統を構築することの意義を理解することにつながりました。さらに、このような取り組みが契機となり、当院では令和4年5月から災害対策委員会が発足し、災害に対する平時からの備え、災害時対応についてシミュレーションし、連携を構築しております。

5月以降はコロナ感染症への対応が変わるものの、今後も院内でクラスターが発生した状況への備えが求められます。これまでのような大がかりな対応はなくなりますが、患者様の治療と回復を優先した対応を取っていかれたらと考えております。当院のクラスター対応を支えて下さった関係機関の皆様にご協力いただき感謝申し上げます。